

Carrier design of graduates in Kanazawa University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20635

金沢大学における卒業生の育成

Carrier design of graduates in Kanazawa University

金沢大学大学院医学系研究科 恒常性制御学
(第一内科学)

金子 周一

金沢大学卒業生の進路

初期研修制度が始まるまで、金沢大学の卒業生は60人から80人が金沢大学に残っていた。しかし、他の40人から60人は金沢大学に残らなかった。自分の同級生を思い出しながら同窓会名簿を見てみると、学生時代の姿が浮かんで懐かしくなる。全ての卒業生が夢と希望をいだいて旅立っていったと思う。どの選択が正しかった、誤っていたかなどはわからないし、ひとりが二つの選択をとることが出来ないで個人々の比較そのものはナンセンスである。ましてや勤務先の名前から、良いとか悪いとかいう判断はあり得ない。しかし、卒業生の進路の全体像が見えてくる。

岐阜県出身の自分

私は岐阜県出身であったので名古屋大学にいくか、岐阜大学にいくか考えた。三男坊であったことも大きい。結婚相手が金沢にいたことで金沢大学に残ったというのが正確であると思う。岐阜に帰った同級生が岐阜大学の内科を選び今は血液内科の医師として活躍している姿をみて、自分もあの時そういう選択があったことを思い出す。今頃は岐阜市内のどこかに住んでいたのだろうか、はたまた、出生地の町で暮らしていたのだろうかと思像をする。そうすると長良川で魚釣りをしている自分もいたのだろうかと考えてみる。

金沢大学に残ったが、卒業する時に大学に残ることは想像もしなかった。しかし、ずっと金沢市内にいたいと思った。成績が不良であったので、金沢市内に残れないときは岐阜に近い福井の大野か勝山の病院に行ければ良いかという程度の考えもあった。

同窓会名簿からわかること

あるレールに乗ってしまうと進行方向が決まっている。進路が違えば変えることも出来るが、そんなに悪そうな進路でなければ変えることはむずかしい。長く乗っていると元に戻って変えることはむずかしく、結局、次の分岐点に進むことになる。そうしてみると、卒業の時は大きく人生を変えるポイントであったと思う。同窓会名簿を見て母校に残った人と残らなかった人で何が違うのかを考えてみる。

将来は、結局、本人の才能や頑張り環境によって大きく左右されるので、類稀なる人を取り上げて意味がない。20代、30代の前半までを見ても、勤務先を移動することが多い。大学名が記載してあった場合に臨床をしているのか、研究をしているのか、何をしているのかわからないことが多い。海外に留学をしている場合はよくわかる。30代後半から40代、50代と進むと、ほぼ勤務先が固定してくる。

全体としてみると母校に残った人は始発から色々な路線が用意されているようである。母校に残っても40代、50代になれば多くが病院に勤務する。開業する人が多い。しかし、その途中で留学をしたり大学で勤務したりすることが多い。母校に残らなかった人の中にも、留学したり、大学で勤務する人もいる。しかし、母校に残った人と比較して少ないようである。親しくしている先生は卒業後すぐに他大学に行き内科の教授になっている。確かに、基礎医学だけでなく、母校に残らなくても大学で臨床医として勤務する人が少なからずいる。

どうやら、卒業したときの進路で大きく異なるのは、母校に残るか残らないか、そして大学のように将来の選択肢の多いところを選択したかどうかである。初期研修制度が始まる前は母

校に残らなくても大学を選択していたので、母校と他大学との有利不利はあったとしても、大学を選べば将来の選択肢は同様に多かったようである。

自分にあった医師の進路

入学試験に携わって実感したことは、学力では入学者間に大きな差がないことである。ずっと大学にいてわかったことは学生時代の成績と将来とはあまり相関がないことである。同級生を振り返ると、自分もそうだが、学生時代の成績が良かったから大学に残っているということはない。ほとんどの卒業生は選択した進路の中で好むと好まざるとにかかわらず懸命に働くために、学生時代の成績よりも、社会に出てからの日々が進路を決定しているように思う。病気や事故といった大きな出来事を別にすれば、走っている線路上での経験や訪れた機会にどのように対応しているか、小さな障害物や分岐に出会う日々の中で、個々の行動が将来を決定しているようである。

選択肢の多い線路である大学に乗っていると、研究、教育、学生といった多くのものが景色に写る。行政や地域医療、保健、介護といった多面的な風景が目の前を通っていく。それらは医師として不要なことだと思える人もいるかもしれないが、窓に映ったり、目の前に現れたりするそれらを経験や機会ととらえて次なる分岐点に進むのは自分である。

生涯を勤務医ですごそうと思っても開業する医師もいる。将来は開業と思っても勤務している医師もいる。大学の助手なんてあり得ないと思っていたが教授になった自分もいる。学生時代の実習から研究なんて不向きと思ったが、やってみたら向いていた自分がいる。医学部の卒業生は、自分が何に向いているのか、自分にどんな才能があるのか、正直、まったくわかっていないと思う。自分が何者かもわからない中で、大学に進めば色々な機会が訪れ、自分が次なる選択をし、以外な将来が待っている。選択肢の少ない進路をとれば色々なものが目の前を通り過ぎる機会が少なく、以外に向いていたかもしれない進路を選択することも無いし、選択出来ないということだろうと思う。

母校に残った卒業生に対する大学の責務

岐阜県出身の卒業生が名古屋大学にいかず母校に残った。自分は思いもかけず研究や教育を面白いと感じて、いつのまにか大学に残った。たった一度の人生なので、こういう機会が与えられ、自分に向いている仕事を与えてくれた金沢大学に本当に感謝している。しかし、もしかすると行きたくない地域の勤務医になっていたかもしれない。それだったら、はじめから名古屋大学に行って岐阜の病院に勤めていた方が良かったかもしれない。母校に残ると、確かに自らの可能性を求めて夢を追うことが出来たが、ずっと北陸にいるのはどうかと思ったかもしれない。途中で岐阜に帰りたいと考えたかもしれない。

金沢大学が卒業生を育成するということは、途中で出身地に帰る、東京に行くという選択肢を与えることも含まれる。そして卒業してすぐに出身地に帰った、東京にいったという選択をした人よりも、さらに立派な医師として育成し、いつでも本人が希望する病院や大学にいける実力を身につけさせることが重要であると思う。そうしてやれば、卒業生は安心して母校に残り、自分の可能性を追求し、最もあった進路を選び、出身地や東京に帰ることが出来る。これが金沢大学において医師を育成するということなのだろうと思う。同窓会名簿をみると、金沢大学はそれが出来ていると感じる。